

目 次

P.1 詩を書こう、詩を読もう
P.2-3 世界はこんなにも
美しい(講演録)
P.4 相撲あれこれ
P.5 所沢の星☆北勝富士関
P.6 第18回所沢図書館ま
つりが行われました!
編集後記

復刊 ハザミ



詩を書こう、詩を読もう 須永紀子

きつと誰でも一度は詩を書いたり、詩人になりたいと思ったことがあるでしょう。詩とは何かという問いには詩人の数だけ答えがあるのですが、ひとことというところばで一つの世界を作るということ。日々の暮らしのなかで見つけたことや感じたことを少ないことばで表現する、それが詩の基本です。

わたしたちが子どもの頃に書いたのは、何かを見つけたという内容の詩ではなかったかと思えます。幼年時代には世界は知らないものに満ちていて新しい発見がたくさんあり、それをことばにすれば詩になりました。

次第にそういう書き方では物足りなくなつて、本を読んで新しい表現を取り入れたりしたでしょう。日常ではない世界を舞台にすることばの音にこだわるなど試行錯誤の時期がやってきました。とにかく書いてみることに。たくさん書くことがいちばんの上達法です。詩は形式やルールがなく、自分

で一から立ちあげていくもの。最近の詩の講座もひらかれているので、そこで学ぶこともできますが、

基本的に一人で書くものです。俳句や短歌には定型や季語を含むという約束があり、句会や歌会、吟行など仲間と楽しむ時間もありますが、詩の場合、同人誌に所属する場合は別として、ほとんど一人です。書くよりも考えている時間の方が長い孤独な文学です。

もし推敲しないで、うまく書けたと感じたなら、それはほぼだめなものだと思つてまちがいありません。書いたものを何度も読み、推敲を重ねても、納得のいくものにならないこともあるでしょう。でも満足できなかった部分に、よりふさわしいことばを探し、見つけたときの喜びは何にも代えられないものです。

自信がついたら雑誌などに投稿したくなると思います。詩はことばを省略するものですから、読者や選者は想像力で余白や行間、作者の気持ちを読みとろうとします。

そこに共感や感動が生まれます。そのとき詩が成立したといえるのです。

詩人になりたいと思つている方はよい詩集をたくさん読んでください。皆さんにお勧めしたい詩集のなかで、今年わたしが最高だと思つたのは川田絢音さんの『白夜』(書肆子午線)です。異国を舞台にした小さな映像作品のような詩篇。詩の形でしか書けない世界が表現されています。殊に旅の機内で隣りにすわつた男を描いた「外套」は、人間は孤独な生きものだけれど、そこにいないものたちに囲まれて生きているのだとおしえてくれます。(おわり)



須永 紀子(すなが のりこ)

一九五六年東京生まれ。二〇一〇年『空の庭、時の径』(書肆山田)で第二六回詩歌文学館賞を受賞。現代詩人会会員。詩集に『森の明るみ』(二〇一四年・思潮社)などがある。八二年より個人誌「雨期」を発行し、現在六九号。

世界はこんなにも美しい 子どもの本と生きる力

講師 早川 敦子 氏 平成29年2月25日(土) 会場・所沢図書館本館

【子どもの本について】

子どもの本の専門家として、ご紹介を頂きましたが、私自身は、子どもの本は、子ども向けだけに限られたものではないと思って、仕事をしてきました。

最初にお話ししたのは、エミリー・R・グロッシュホルツの『子どもの時間』という詩集です。

これは一人の母であり、哲学者であり、そしてこの地球に生きるものとして平和を願ってきた一人の女性が、子どもをテーマに言葉を紡いだ本です。

この本の「耳を澄ます」という詩は、この世界に生まれてくる命に向かっの言葉です。

そして、その言葉こそ、子どもの本にとって大切な「人生の信頼」を語っている。子どもの本と大人の本で何が違うのかは、この「人生の信頼」が、直球で凝縮された言葉で構築されていることが重要な特色だと思います。

それは、ほんの少ししか言葉を使っていない絵本でもそう。

それを通して、大人が子どもに語りかける言葉、子どもに絵から与えられる言葉、それがまさしく「人生の信頼」という特色になっていると思います。

【本へのとびら】

「人生の信頼」ということといえば、ジブリの仕事に、私はそれを感じます。宮崎駿さんが、『本へのとびら』で語っておられることが印象的です。彼は、戦争や関東大震災で色々な物が崩れていくのを見たわけです。その中から、どうやって人生の信頼を取り戻したと思いますか？

それは、彼の好きな岩波少年文庫、特に外国の作品にものごく触発され、そこにある世界への信頼だったというのです。この世界を日本の子どもたちに伝えるために、「ジブリをつくりたい」と真剣に思ったということです。

この本では、児童文学は、大人の文学のように人間の存在に対する厳格で批判的なものとは違って、
「生まれてきて良かったんだけだ」、
「生きていて良いんだ」ということを、子どもたちにエールとして送る。それが、児童文学が生まれたきっかけであり、子どもに向かつて絶望を説くなどということと語っているのです。

キーワードは、子どもたちへのエールということ。絶望でなく、希望。これが、人生への信頼という言葉で私がお話したことであるわけです。では、子どもの本の作品をとりあげてみましょう。

【アンジュール】

ガブリエル・バンサンの『アンジュール ある犬の物語』。飼い主に捨てられた一匹の犬が、さすらいの果てに少年と出会うまでの一日を、シンプルで描き出した絵本です。色彩もない絵本なのに、なんと深い、心にふれる物語が紡ぎだされているのでしよう。飼主の車を追って、走ることを諦め、心細く疲れ果てた犬が、少年と出会う立ち止まり、さてどうしよう、こいつは友だちかな、

と少しずつ歩み寄っていく。その姿を追うと、心がやわらかなるのを感じます。

そして二人が、友だちを見つけた、と思った瞬間のうれしさが伝わってきて、私たちが絵の世界へ引き寄せ、心を詩で満たしていくのです。

そこから「人生の信頼」というものが伝わってきたとき、子どもの心にどのような言葉が生まれてくるでしょう。一緒に見ていた親からは、どのような言葉が子どもに発せられるでしょうか。

そこに、人生への信頼が、子どもの心と大人の心にも、良い言葉を満たしていくという気がします。

【急行「北極号」】

もう一つが、村上春樹訳、クリス・ヴァン・オールズバークの『急行「北極号」』です。

急行「北極号」に乗って、北極点の街に旅をした少年の思い出。雪や空の星、北極で出会ったサントさんのそりから見た街の人々の様子の絵は、『アンジュール』のシンプルで白黒の絵と描き方が全然違います。

また、この絵本にはものすごく

たくさん文字があるのですが、こういう対極の絵本にも同じ人生の信頼というのが見えてきます。

現実ではない世界に、旅をするということ、その世界があると信じていなければ成り立ちません。

それを信じる力が、子どもにはある。子どものころは誰もが常識や理屈を離れた、自由で驚きに満ちた世界を持っていて、「北極号」

の旅は、私たちにそんな懐かしい世界を思い出させ、想像力をよみがえらせる旅となるのではないか。

この本の最後は、現実に戻ってきたその少年が、サンタさんからもらった鈴の絵で終わります。その鈴の音は、父さんにも母さんにもきこえない。大人になると、もうその音は誰の耳にも届かないのかも知れない。これが現実です。

ところが、大人になった少年は私たちにこう語ります。「本当に信じていけば、それは聞こえるんだよ」と。この絵本の最後のページの銀の鈴からは、不思議なすばらしい音が本当に聞えてきそうな思いにとられます。

これら二冊の絵本は、子どもの本になぜ「人生の信頼」が核にあるのかを、しっかり見せてくれる

本だと思えます。想像力や、それらを信じる力、人生の力。自分の心の中の世界が豊かであればあるほど、こういうものを信じる事ができるのです。

でも、それを豊かでなくすようなことが、世の中にありません。

【橋をかける】

子どもの本が、心の中の世界を重要な要素としていえることについて、一冊の本をご紹介します。著者は皇后美智子様、タイトルは『橋をかける』です。ご自身の本の関わりを綴られる中で、自由な精神「翼」と、人生の信頼を「根っこ」として培われたことが感動的に伝わってきます。

そして「橋」というキーワード。自分の心の世界が育っていく過程で、本は自分の世界と外の世界に、橋をかけてくれる。

限りある人生で、経験できることは限られています。でも、本を通して他者の経験が共有できたとき、子どもの本は、自分と他者のかけ橋になってくれるのだと思います。

そして、そこから共感が生まれ、たくさんのお話を受け入れられる

ようになっていく心の豊かさが、他の人たちとつながっていく道筋を開いてくれるのだと思います。

これは大人も同じで、広い世界で他者との出会いから大きな物語が広がっていくのです。

【子どもの本の翻訳】

私が翻訳家として、子どもの本も翻訳してきたのは、文字が少ないからでしょうという人もいます。でも、文字が少ない分、実はとても大変なのです。

子どもの本は、外と内の世界をつなぐかけ橋となる。そしてそのかけ橋を持つ子どもは、世界と日本をつないでくれるようになるに違いないと思うのです。

日本の作品は、放っておいても読めるけれど、海外の作品は訳さないと日本の子どもたちや、大人にも、図書館さんにも、書店にも届かない。

だから、まだまだ日本は翻訳が必要だと思っていて、翻訳家の仕事をやめずに続けているわけです。日本で生き、日本文化の中で育ち、日本人として生きる私たちが、言葉を介して他者と出会う。

それが、翻訳文学の重要な役割



早川 敦子 先生

《講師紹介》

早川 敦子（はやかわ あつこ）

津田塾大学学芸学部英文学科教授。日本国際児童図書評議会の理事、副会長等を歴任。専門は20世紀から現代にいたる英語圏文学や翻訳論。『世界文学を継ぐ者たち』等、多くの著書、翻訳書を持つ。吉永小百合さんが朗読する原爆詩の英訳はライブワークでもある。

だと思えます。そこで目の色も生活も違う子どもと出会うことで、日本の子どもたちは、何だろうと思っわけです。そこから自分とは違う別の誰かとの物語を、始めてくれるのではないのでしょうか。

それが、本当の意味でのグローバルゼーションというものの一歩になっていくことを私は願っています。

相撲あれこれ

相撲の歴史

相撲の初期形が始まったのは、農耕が始まった縄文時代から弥生時代にかけてであると考えられています。その頃の相撲は、農作物の豊凶を占う農作儀礼として行われ、神事として発展しました。のちに皇室や貴族に伝えられ、やがて宮中で行われる相撲節会（すまいのせちえ）へと発展したようです。現在でも全国各地の神社で行われている「神事相撲」「奉納相撲」などは、その名残であるとされています。

初期の相撲は、相手が半死半生になるまで戦ったそうですが、相撲節会が行われる頃になると、内容もだんだん整理されてきて、相撲の古法とされた、蹴る、突く、殴ることなどが禁止され、現在の相撲に近いものになっていったようです。しかし、土俵はまだありませんでした。

鎌倉時代になると、相撲節会は

廃絶し、武士の力量を鍛錬する実質的なものとなっていきます。源頼朝も、上覧相撲をしばしば行っていたようです。

鎌倉時代末期になると相撲は廃れてきます。しかし、各地方で相撲節会や神事相撲によって培われた相撲人（すまいびと）が育成され、相撲は庶民的色彩を濃くし、大衆娯楽としての下地が作られていきました。

その後、織田信長が相撲を好んだことで、戦国時代になって再び相撲は武家の間でもはやされるようになります。このころ、即決に勝負をつけるため、丸い円などを描いて一定の境界線を作ったことが土俵の始まりとされています。江戸時代中期以降は、相撲興行が盛んになり、季節の風物詩として人気を博します。武士から庶民に至るまで、多くの人に親しまれるようになり、今日私たちが楽しんでいる大相撲の基礎が確立されました。

相撲雑学

◇番付◇

相撲界は番付社会ともいわれ、



番付表を見れば角界内での序列は一目瞭然。番付によって、衣食住をはじめ、ありとあらゆる面で、厳然と待遇の違いが存在します。

もつとも大きく違うのは、十両以上の関取衆と幕下以下の若い衆との差。給料も、十両になれば月給百万円以上もらうことになりませんが、幕下以下は無給です。角界では「番付が一枚違えば家来同然、一段違えば虫けら同然」という言葉が古くからあります。

◇懸賞の歴史◇

懸賞の歴史は平安時代の相撲節会までさかのぼり、勝者に織物や米などが贈られていました。武家時代になると弓、弦、矢が贈られるようになり、江戸時代から明治時代にかけては「投げ纏頭（はな）」といって、観客が自分の名入の羽織やたばこ入れを土俵に投げ、これを呼出（力士を呼び上げる人）が拾って勝ち力士に届け、その付き人が投げ主に届けると、ご祝儀がもらえるという慣習がありました。懸賞金を受け取る際に切る手刀は、五穀の守り神三神へ感謝の意を表す礼儀です。

◇^{しこ}四股名◇

もともと四股名は「醜名」と書き、大地を踏みしめ地中の邪気を追い払う儀式を行う者のことを指しました。また、「醜」という字から、自分は名乗るほどの者ではないという謙遜の意味もありました。江戸時代になり、力士が土俵でしこを踏むことから、四股名の文字が使われるようになりました。

【参考文献】

『物語日本相撲史』

川端要壽／著 筑摩書房

『相撲』土屋喜敬／著 法政大学

出版局

『大相撲の解剖図鑑』伊藤勝治／

監修 エクスナレッジ

おすすめの本をご紹介します

● 『大相撲の見かた』

桑森真介／著 平凡社

● 『写真図説相撲百年の歴史』

池田雅雄／編集委員代表

日本図書センター

● 『大相撲行司さんのちよつと

いい話』

三十六代木村庄之助／著

双葉社

☆所沢の星☆ 北勝富士関

所沢市観光大使の幕内力士、北勝富士関をご存知ですか？ 初の横綱戦で鶴竜関を破ると、平成二十九年十一月場所では横綱稀勢の里関にも快勝しました。兄弟子の隠岐の海関と共に横綱白鵬関を追いかける優勝争いを演じるなど、上位陣を脅かす存在となっている力士です。

◆北勝富士関とは◆

所沢出身で初の幕内力士、北勝富士関は、南小、南陵中を卒業した後、高校相撲の名門、埼玉栄高校（大関豪華道関、新鋭貴景勝関などが在籍）に入学、三年生で高校横綱になりました。さらに相撲の名門、日本体育大学に進学し、二年生で学生横綱、相撲部主将も務め、世界大会に出場するなど、将来期待の若手として注目を集めました。

元横綱北勝海、日本相撲協会の八角理事長率いる八角部屋に入門後、平成二十七年三月場所です初土俵を踏みます。その後は十一場所連続で勝ち越しを決めるなど、期待に違わぬ大活躍を見せ、平成二十八年十一月場所です新入幕、平成二十九年十一月場所では、西前頭三枚目で大健闘しました。

◆北勝富士関の魅力◆

北勝富士関の魅力は、取組を見ていただければ一目瞭然。立ち合いかから頭でぶちかまし、そのまま一気に押し切るケレン味のない相撲が最大の魅力です。立ち合いの変化や相手の押しに乗じて引き落とすような相撲は一切なし。愚直に低い姿勢から押し上げる相撲を取りきっています。新入幕の場所では、大柄の逸ノ城関を一気の押しで土俵下まで吹っ飛ばしたこともあるほどです。

もう一つの魅力は人柄です。NHKの大相撲放送を見る際は、ぜひとも入場から退場までを見てください。誰よりも丁寧に、深々と頭を下げる姿、一つひとつの動きを大切に所作、相撲を愛し、感謝し、常に前向きに全力で取り組む姿がそこにあります。悔しい負け方をした際も、相手に敬意を

払い深々と頭を下げる、簡単なようではなかなかできることではありません。

そんな北勝富士関ですが、一旦相撲を離れると、とても気さくで優しく、真面目で少しおちゃめな好青年です。カラオケもとても上手で、部屋の千秋楽パーティーではその美声を披露しています。



◆ここに注目◆

■化粧まわし

現在、北勝富士関は五本の化粧まわしを持っています。その中には、トコろんの入ったものもあるんですよ。

■ルーティーン

野球のイチロー選手のように、一流の選手には独特のルーティーンがあります。北勝富士関も土俵に上がってから仕切りまで、いつも同じ流れでリズムを作ります。どのようなルーティーンかは、ぜひご自分の目で確認してください。

■ライブ

平成四年生まれの北勝富士関。同学年には御嶽海関や宇良関、大奄美関などがいます。中でも御嶽海関は宿命のライブです。大学四年のときに学生選手権大会の決勝で当たった二人。大道（御嶽海関）が中村（北勝富士関）を押し出して学生横綱になり、大道は幕下付け出しの資格を得、中村は前相撲（番付に載る前の格付け）からのスタートになりました。北勝富士関は常々、「御嶽海関が目標です」と公言していますが、一方で「前相撲から取って良かったです。勉強になりました」とも言っています。

■所沢出身力士

北勝富士関の他にも三人の所沢出身力士がいます。羅王（立浪部屋）、爆羅騎（ばらき 式秀部屋 ※羅王の弟）、西村（武蔵川部屋）です。江戸の大関より故郷の三段目、地元力士を応援しましょう。

小山 貴之（こやま たかゆき）

所沢市役所勤務。北勝富士関を応援するため、福岡や大阪にも遠征するほどの相撲ファンである。

第18回所沢図書館まつりが 行なわれました!

平成二十九年十一月十八日・十九日の二日間で、第18回所沢図書館まつりが、所沢図書館本館にて開催されました。あいにくの雨天にもかかわらず、多くの方が来館され、大変賑わいました。

今回の第18回所沢図書館まつりにおいて、実行委員長としてご活躍された小山実紀さんに、図書館まつり終了後、インタビューさせていただきました!

小山さんは、現在大学四年生で、学業の傍ら、実行委員長を務められました。図書館まつり当日も、アナウンス等でご活躍されていました。

【実行委員長としての図書館まつりは、いかがでしたか?】

小山さん…まつりの実行委員長という大役をこれまで引き受けたことがなく、ゼロからのスタートでしたが、今は無事に終わり安堵しています。また、まつり当日のシフトの合間を縫って様々なイベントに参加できたので、見識も広がったと感じました。

【実行委員長の活動の中で、気づいたことなどはありましたか?】

小山さん…実行委員になる前は、まつり当日のイベント等は、図書館側があらかじめ用意していたイベントを踏襲するという形で、これまで施行されてきたものかと考えていました。しかし、実際に実行委員会が始まってから、基本的には、一から組み立てていくものがあつたので、全て図書館任せではないという部分に驚いた点がありました。

【今年の図書館まつりのイベントの中で、一番思い入れがある企画などは、ありましたか?】

小山さん…ビブリオバトル(※)ですね。ビブリオバトルを観戦しようか考えていたのですが、シフトの都合上、途中からの観戦となつてしまうので、観戦を断念しました。

【来年も、実行委員として参加したいと思われませんか?】

小山さん…機会があれば参加したいです。

小山さん、お忙しいなか、ご協力いただきありがとうございます!

※ビブリオバトル

一人一冊の本について紹介し、一番多くの観客が読んでみたいと思つた本を、チャンプ本とする、本の紹介対決のこと。

第18回図書館まつりで行われたビブリオバトルのチャンプ本は、『カラスの教科書』(松原始著/雷鳥社)でした!



図書館まつり期間中に、トコロんが来てくれました!

編集後記

早いもので平成になって30年も経つんですね。次の元号は何になるのでしょうか。(K)

編集に初めて参加しました。わかりやすく、読みやすい記事にするというのは、難しいですね。(S)

編集発行：所沢市立所沢図書館 〒359-0042 所沢市並木 1-13

ホームページアドレス パソコン <https://lib.city.tokorozawa.saitama.jp>

携帯電話 <https://lib.city.tokorozawa.saitama.jp/k>

スマートフォン <https://lib.city.tokorozawa.saitama.jp/opw/OPS/OPSINDEX.CSP>

電話 / FAX

本館 04-2995-6311 / 04-2992-1421

所沢分館 04-2923-1243 / 04-2928-8195

椿峰分館 04-2924-8041 / 04-2928-8148

狭山ヶ丘分館 04-2949-1193 / 04-2949-8577

松井小学校図書館 04-2992-2796 / 04-2992-2797

富岡分館 04-2943-3636 / 04-2943-6680

吾妻分館 04-2924-0249 / 04-2928-8250

柳瀬分館 04-2944-4023 / 04-2945-7236

新所沢分館 04-2929-1905 / 04-2929-1906